「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うために発行するメール通信です。

目次

◆安西英明の探鳥会講座　「探鳥会の歴史」
◆探鳥会のリスクマネジメント講座　「シリーズ第 2 回：マムシ」
◆探鳥会訪問記（日本野鳥の会東京）
◆探鳥会保険集計結果（2013 年 3 月分）
◆普及室からのお知らせ
・2012 年度野鳥撮影マナーアンケート集計結果速報
・2013 年度「ヒナを拾わないで！！キャンペーン」がスタート！
・探鳥会スタッフ通信の購読について

◆安西英明の探鳥会講座

「探鳥会の歴史」

日本野鳥の会を創設した中西悟堂の『定本 野鳥記 第一巻』（春秋社）の前書きから抜粋させていただきます。

・・・野の貢、山河の頁の楽譜であるあの羽族たちを、私は今日まで何ものにもまして愛してきた。あの光の粒は、空間と、藪林と、森と、渓とを彩っているように私には見えた。およそ悲哀と邪悪に囚われぬあの歓喜の歌と、およそ休息を知らぬあの活発な動作とは、生命の最も鮮やかな証拠であるように私には思えた・・・

＜初の探鳥会秘話＞

2004 年、私は日本野鳥の会 70 周年の記念事業を担当しました。多くの支部でも既存の探鳥会を 70 周年記念と位置付けていただくご協力を得ました。財団としては、日本初の探

鳥会を振り返り、再現するという試みを実施しました(野鳥誌では2004年8月号にて報告)。会が創設された1934年の6月2、3日に富士山麓須走で開催された第一回探鳥会については、後に野鳥誌などでも書かれていますが、当時の日程やコースを確認し、地元須走の参加者のご遺族と連絡をとるなど、東富士支部の菅常雄支部長には大変お世話になりました。

父金田一京助とともに中学生で参加していた春彦先生がご存命でしたので、私は春彦先生宅に当時の様子を伺いに出向きました。先生は「慈悲心鳥の声とオオルリの輝く青は今でも覚えている」と言っておられました。慈悲心鳥とはジュウイチの声を「慈悲心」と聞いたことに由来する古い呼び名で、案内役の悟堂先生がそのように解説されたのでしょう。33人の参加者の多くは双眼鏡を持っていなかったはずで、今日のような望遠鏡もありませんでしたから、肉眼でオオルリを堪能できるほど、野鳥との距離が近かったものと思われます。なお、先生の健康が許せば70年前と同じコースをご一緒したかったのですが、直前の5月に故人となられたことは残念至極です。

▲2004年に実施した70周年記念探鳥会の集合写真
70年前の初の探鳥会と同じ場所で（中西悟堂長女の小谷ハルノさん、北原白秋の孫にあたる北原リサさん、戦後の当会復興を支えた津戸英守さん・鈴木孝雄さん、本文に登場する柴田敏隆さん・菅常雄さん、北原白秋の孫にあたる北原リサさんなどの顔ぶれが見える）

ほかにも印象深い話を3つ紹介させていただきます。

当時の参加者に送られた案内文は、悟堂先生自らがガリ版で作成したものです。会費は10円となっていて「東京駅集合の折、中西悟堂へお渡しください」と付記されています。最後に注意とあって「鳥を驚かさぬため、なるべく赤色の服装をさけられたく」と記されており、色に敏感な鳥への配慮を促しています。これは、その後、探鳥では「目立つ服装は控えよう」とされたフィールドマナーの原点と言えるかも知れません。

一方で、案内文に「なお、珍草多ければ胴らん持参も可」とあったり、当時は野鳥の巣や卵をむしろ積極的に観察したりしていました（今日であれば、フィールドマナー「近づかないで野鳥の巣」に沿って、繁殖に影響がないような配慮が求められますが）。エピソードとして有名になったのが若山牧水夫人と北原白秋氏で、夫人はメジロの巣を見た際、

その巣の緻密さに愕然として固まってしまい、白秋氏に至ってはコルリの卵の美しさに涙したと記されています。

悟堂先生自身は 1978 年の野鳥誌で、初の探鳥会を振り返り何より嬉しかったこととして「1 羽のシジュウカラをみんなで『あっち　向いた』『フンをした』と言って肩書きも身分も忘れ、無邪気に感心していた光景を見て、これこそが野鳥の会のあり方だと思った」と書かれています。

＜過去の連載や特集＞

古い野鳥誌はお手元にありますか？ 私が探鳥会のリーダー役を頼まれた時に役立ったのは、1973 年から野鳥誌に連載された柴田敏隆氏による『探鳥会のあり方と技術』です。1978 年に自然観察の企画や指導の参考書としてまとめられた自然保護協会発行の『自然観察指導員ハンドブック』の数年前ですから先駆的でもあったし、今読んでいただいても参考になると思います。ちなみにその頃の連載には、高野伸二氏による『識別講座』や金田平氏による『自然保護を考える』もありました。これらで勉強して今日の基礎を築いたのは私だけではないでしょう。

仲間がよく言うのですが、古い支部報も野鳥誌も宝の山です。ここでは探鳥会に関わる方に参考になると思われる野鳥誌の過去の連載や特集をまとめておきます。

連載など

1973 年 1 月～74 年 5 月号『探鳥会のあり方と技術』

1980 年 12 月号『この感動を分かち合おう』

1992 年 3 月～94 年 3 月号『案内人への道』

1994 年～95 年『野鳥案内術実践編』

特集

1982 年 1 月号『探鳥会―より楽しい探鳥会を求めて』

1983 年 3 月号『自然教育―自然から何を学べるか』

1988 年 5 月号『バードウォッチング―探鳥会を考える』

1989 年 10 月号『地球環境と野鳥―地球環境とバードウォッチャー』

1991 年 2 月号『野鳥保護シンポジウムー環境教育の課題』

1993 年 5 月号『あなたも案内人―はじめての案内人体験記』

1998 年 11 月号『探鳥会に行ってみよう』

2002 年 11 月号『秋冬のバードウォッチングー探鳥会を楽しもう』

2003 年 11 月号『あの人を誘ってバードウォッチング』

上記のほか、私が書かせていただいたものでは、財団から支部宛に発行していた『バードニュース』の連載で 1986 年 9 月 (NO29～32)「探鳥会、あの手この手」、91 年 3・4 月 (NO59～71)「安西の探鳥会リーダー通信」、1994 年に支部に 1 セットずつ贈呈した『野鳥かみしばい』の手引き（付属の冊子)、また、支部宛に送っていたものとして 1995～2001 年発行の『探鳥会リーダー通信（準備号で 8 号まで、以後第 1 ～8 号)』や 1999～2008 年発行の『バードウォッチング案内人通信』もあります。

（普及室/安西英明）

◆探鳥会におけるリスクマネジメント

「シリーズ第１回　：マムシ」

野外における危険な生物は？との問に、ほとんどの人がマムシと答える。また、少し前までは、本土に生息している毒蛇はマムシだけだと教わってきた。さらに、マムシに咬まれたときの応急手当も、最新の情報とはかなり異なった対応を教えられてきた。これらのことからも分かるように、マムシに関する知識は必ずしも十分とはいえない。探鳥会など野外活動の指導者は、マムシに関する十分な基礎知識と最新の情報を熟知しておく必要があろう。

＜マムシはどんな生き物？＞

マムシは、クサリヘビ科マムシ亜科マムシ属の一種で、とから海峡（屋久島）以北の日本全土に分布している。

頭部はほぼ長三角形でやや大きく、頚部のくびれが明瞭。胴は他のヘビに比べやや太くて短く、尾が急にくびれており短いのも特徴の一つだ。体長は 60ｃｍ以下、胴には大きな銭形斑紋があり、腹は黒く、黄褐色の不規則な斑紋がある。頭部の目の前下方に一対のピット器官があり、獲物や敵から出る赤外線を敏感に感受し、闇夜でもその存在を立体的に感知することができる。

＜マムシの見分け方＞

・他のヘビに比べ尾が短く、体つきがずんぐりしている
・頭部はほぼ三角形で、角張っており大きい
・頚部のくびれが明瞭
・動作はあまり速くなく、じっと身構えてほとんど動かないことが多い
・胴にある大きな銭形斑紋が特徴
・体色は黒褐色のものが普通だが、体色や斑紋には変異が多いので、要注意。中には、赤褐色のものもいる

▲銭形模様の他、ずんぐりした体型や尾が短いのも特徴

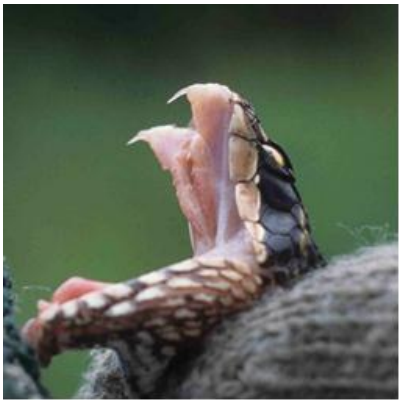
・目は、ネコの目のように縦の楕円形をしている
・アオダイショウの幼蛇は、マムシににているが、マムシのような赤または茶色っぽい体色はなく、体が細長い。また、目は魚のように丸いので見分けられる

▲アオダイショウの幼蛇：マムシと見間違えられることがある

＜マムシの毒は？＞

頭側部の張り出した部分に毒腺があり、導管で毒牙に連結している。毒牙は、注射針と同じ構造をしており、効率よく毒が注入できる仕組みとなっている。毒牙は、短い上顎骨の先についており、ふだんは上顎と平行に倒れている。しかし、攻撃の時になると、口を大きく開き、骨と筋肉の作用で上顎と直角に立つようになっている。

マムシによる死亡者は、年間平均約 13 人程度であり、致死率は0～5 %程度といわれている。



▲マムシの毒牙：噛みつくときには牙を立てる

＜マムシの習性は？＞

マムシの活動期は、3 月下旬から 11 月中旬頃であり、活動最適気温は 25～35 度といわれている。活動は、春や秋に於いては日中が多いが、夏の気温が高いときには夜間に活動することが多い。夏期に、谷川沿いの涼しい場所でよく見かけるのは、気温と耐熱の発散

関係によるものである。

自ら獲物を狙う以外はめったに咬みついたりしないが、敵が防衛範囲内に進入したり踏んづけたりすると、すばやく飛びかかり毒牙で咬みつく。

成長したマムシは、ハタネズミやカヤネズミなどの小型のネズミ類を好んで餌とする。一方、幼蛇はカエルやドジョウなどを餌とすることが多い。

マムシによる被害は、秋に比較的多い。これは、気温が低下しマムシの行動が鈍くなり、逃避行動が低下することが要因の一つとして考えられる。さらに、キノコ採取などで素手を地面に近づけるため、落ち葉の下などにひそんでいるマムシに咬みつかれることが多くなることも要因の一つである。また、春や秋の天気の良い日には、岩場の上など、とてもそんな環境の場にいるとは思えないような場所でひなたぼっこをしていることがあるので、注意が必要だ。

＜もしマムシに咬まれたら＞

① もし咬みつかれたら、直ちに逃げること。マムシは、2 度 3 度と連続攻撃をしてくることがある。また、可能であれば咬みつかれたのがマムシかどうかを、確かめることである。マムシの咬み痕は、普通 2 本の牙跡がはっきり残る。（シマヘビなどの場合、歯の跡が複数で 2 列に並んでいる。）

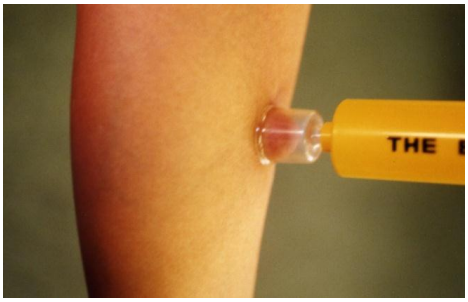
また、牙の痕から出血が止まらないことが多い。この他、痛みと腫れが出る。毒が入ったら、鋭い痛み（ハチに刺されたような痛み）を感じ、その痛みはずっと後まで続く。咬まれた局部は、必ず腫れる。腫れは、すぐに始まる場合や数分たってから腫れる場合などあるが、いずれにしてもひどい腫れとなる。

② 次に、あわてないこと。咬まれた本人はもとより、周りの人間も含めてパニック状態に陥ることがある。死に至るようなことはほとんどないことなどを伝え、安心させることが大切。（心配のあまり、脈拍が早くなると毒の回りも早くなるらしい。マムシによる年間の被害者は約 3,000 人、死亡者は年間 10～13 人（1～2 人程度との説もある）、それに比べスズメバチによる死亡者は年間平均 43 人、マムシによる致死率は、上限 5～7 ％下限 0 ％であり、スズメバチより死亡者数の点ではかなり低いことを伝え、安心させるのも一案。）

③ 咬まれた部位を動かさないようにし、体を休ませること。咬まれた部位ならびに全身の安静が極めて重要だ。（自分で医者に行く場合でも、走ったりしないこと。）マムシに咬まれた動物は、ただひたすらうずくまってじっとしている。それが毒を局所にとどめる

最善の方法のようだ。なお、患部を少し高い位置に保っておくことも有効といわれている。

④ 傷口からできるだけ毒を吸い出す。（マムシの毒は、人間の血液の中に入って毒性を発揮するので、血を飲み下しても人体に影響はないとのことである。ただし、口の中に傷のある人などは、注意が必要。専用の毒吸い出し器を持ち歩くとよい。）なお、日本のヘビの場合、注入された毒を取り出したり、症状を軽くしたりするために、素人にできる手当は全くないとも言われている（NACS-Ｊ野外における危険な生物）。

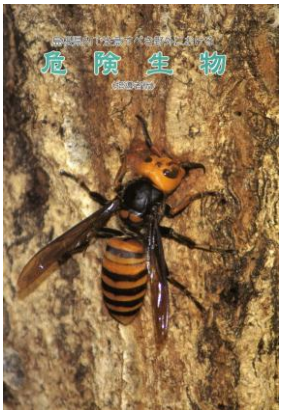


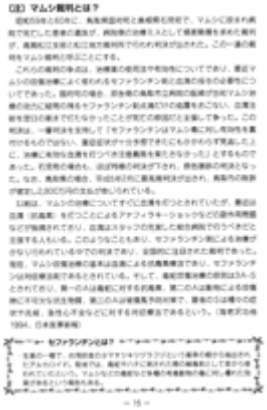
▲毒吸い出し器

⑤ 心臓に近い部位を幅の広いもので縛り、血行の鈍化を図る。（腕や足に咬みつかれた場合、その傷口より 10ｃｍほど心臓に近い箇所をタオルなど幅の広いもので縛る。この場合、あまり強く縛らずに指が 1～2 本通る程度とする。注意することは、やたらと強く縛らないことである。血行を止めてしまうと咬傷付近の毒が薄められずに停滞するため、その部分の被害が強くなる。また、縛る場所は、30 分位経ったらさらに上部に移動すること。縛るという行為は、被害者を安心させることにもなるので、その点の配慮もするとよい。）なお、日本のヘビの場合、圧迫帯による効果はほとんど立証されていないともいわれている（NACS-Ｊ野外における危険な生物）。

⑥ 被害者を、できるだけ速やかに医者のもとに運ぶ。その際、血行を早めないように背負ったり車に乗せたりする。また、精神的ショックを和らげるため、励ましたり、お茶や紅茶など利尿効果のあるものを与えたりすることも配慮の一つ。

⑦ 医者により血清注射などの適切な処置を受ける。（血清は、受傷後１時間以内が最も有効いわれている。また、数時間後でも血清は有効に使えるともいわれている。血清注射に伴うショック症状なども危惧されるので、各種の症状に対応できる総合的な病院における処置が理想である。なお、最近セファランチンを使用した処置が行われることが多いようであるが、マムシ裁判の事例にあるように、慎重な対応が必要だ。）（注；「マムシ裁判」や「セファランチン」について詳しく知りたい方は、「野外で注意すべき危険生物」佐藤仁志著を参照されたい。野鳥の会バードプラザの書籍コーナーで、1 冊 500 円で入手できる。）





《その他の注意事項》

・応急の傷口洗浄剤としては、タンニン５ %溶液がよいとされている（お茶でも代用可）
・強く縛って止血状態にすると、毒に侵されている局部への血流が止まり、毒作用に加え酸素欠乏で組織が死に、後に重大な機能障害などを引き起こす恐れがある
・以前は、傷口を切開して毒を吸い出すといった救急法が伝えられていたが、かえって細菌感染等をまねき逆効果となることに留意
・氷などで冷やさないこと。組織の破壊をかえって早める恐れがあるといわれている
・安堵感を与えるためといって、酒などを飲ませないこと。当然のことながら、酒は血液の循環を早めてしまう

＜マムシ咬傷における医師の対応＞

最近、身近なところでマムシに咬まれた事故が発生した。もしもの場合の参考になると思われるので、その時の医師による治療の状況などをもとに、マムシ咬傷における医師の一般的な治療法等について紹介しておこう。

病院に行けば、まず局所の消毒などとともに、問診や採血、マムシによる咬傷かどうか聞き取り、咬み跡痕（多くの場合約１ｃｍ間隔で 2 カ所の咬み跡が確認できる）などによる確認作業が行われるはずだ。次に、局所的治療と全身的治療が症状に応じて行われる。

局所的治療としては、消毒の他、切開、排毒、緊縛、減張切開などがある。

切開は１ｃｍ程度の小切開で、そこから毒を絞り出す。咬まれてから 30 分以内は毒が 2～3ｃｍ以内に留まっており、30 分以内に切開しないとほとんど効果がないという説がある一方、6～48 時間まで局所に存在するという説もある。また、切開しなくても、ほとんど影響がないとする医師もいる。前述の身近な例の場合、咬まれてから１時間以上経過していたが、１ｃｍほどの切開を行い、血を絞り出すようにして排毒が行われた。この時の痛みは相当激しかったようだ。

なお、減張切開は腫れがひどい場合に行われる治療である。また、緊縛はオーストラリアなどで行われている対処方で、咬まれた場所の前後を含む広い部分を広い包帯などで巻いて圧迫し、副木を当てるなどして固定する方法だが、わが国ではほとんど行われていない。

全身的治療としては、抗生剤、利尿剤、破傷風対策薬剤などの投与や、セファランチン療法、抗血清療法などがある。これらの治療法の選択は、主として腫れの進展速度や進展範囲によって判断されるらしい。例えば、①局所のみ、②手関節・足関節まで、③肘関節・膝関節まで、④１肢全体に及ぶ、⑤それ以上または全身症状を伴う、などの目安が設定されてい

る。③以上の症状が見られた場合に抗血清療法が用いられ、②以下の場合にはセファランチン療法が破傷風薬の注射や抗生剤、利尿剤投与と平行して行われるようだ。

なお、これらの治療は入院を原則としており、数日間は入院を覚悟した方がよい。身近な例の場合も 5 日間の入院を余儀なくされ、最初の 2 日間は患部を冷やしながら点滴による治療が行われたという。また、退院後も破傷風対策のため、1 ヶ月後と半年後に通院した。

マムシ一口メモ

以下に、その他の参考となりそうなことを列記しておく。

・足の生えたマムシの正体は？→マムシのペニスは 2 本、雄のマムシがペニスを出した状態だ

・牙から出される毒は、実は酵素で、消化を助ける作用あり。冬眠前に四六時中餌を食べ、脂肪を蓄えることができるのも、この酵素のおかげといわれている

・交尾に要する時間は、6 時間ほどと長い。また、射精された精子は 2～3 年も雌の体内で生き続けるといわれている（マムシは輸卵管が長く、冷血動物）

・どくろを巻き体をいくつかのＳ字上に構えているときは要注意！　Ｓ字状に曲げた体を瞬時に伸ばし攻撃してくる。飛び跳ねてくるとか、体の 3 倍も飛びかかってくるとかは眉唾もの。50ｃｍ以内に近づかなければまず安全

・「秋口のマムシは、子持ちなのでよく人を咬む」とか「マムシは親と同じ形をした子供を産み（卵胎生）、その子供は親の腹をかみ切ったり、口から出てくるので、産卵期が近づくと牙を折るためやたら咬みつく」などまことしやかなことがいわれているが、これらは全くの俗説。マムシの子は夏（8～9 月）に産まれ、子供はお尻の穴（総排出口）から出産する

・マムシはひどい近視である。従って、視力で遠くにいる人を認識することはできない

・マムシに咬まれても、2～3 時間以内では局所の腫れも小さく、急性心不全などの症状も出現しない場合もある

（理事長/佐藤仁志）

◆探鳥会訪問記（日本野鳥の会東京）

■はじめに

本号より記事を担当させていただきます堀本理華と申します。私は 4 月に財団に入っ

たばかりで、学生時代は海藻とハチの研究をしていました。自然は大好きですが、鳥のことは知らないことばかりで、探鳥会に参加するのも今回が初めてです。探鳥会訪問記では、なかなか他の支部の探鳥会に参加することの難しいリーダーの皆さまに代わって、様々な探鳥会を訪問し、私自身勉強させていただきながらその様子を紹介していこうと思います。探鳥会初心者の目に映った探鳥会の様子としてお読みいただければ幸いです。

新浜探鳥会

参加日時：2013 年 4 月 14 日 10 時～15 時 30 分

天候：晴れのち曇り

＜探鳥会の概要＞

新浜探鳥会は、かつて野鳥の楽園「新浜（しんはま）」として知られた千葉県の行徳周辺を巡る探鳥会です。日本野鳥の会東京、千葉県野鳥の会、行徳野鳥観察舎友の会の 3 団体の共催で実施されています。

コースは普段立ち入りが制限されている行徳鳥獣保護区（1960 年代後半から開発・埋め立てが進むなか、残された干潟や沿岸湿地を守ろうとする自然保護活動により保護区に指定）の鳥をゆっくり見るショートコースと、行徳鳥獣保護区に加えて江戸川周辺の鳥も見るロングコースがあり、今回はロングコースに参加しました。この日は約 50 名の参加があり、観察は経験者グループと初心者グループに分かれ、両グループがときどき合流しながら進められました。

▲江戸川本流の淡水での観察の様子

＜解説の様子と観察した鳥＞

リーダーは全ての鳥に愛情を欠かしません。ありふれた鳥に対しても、

「カワウは目がエメラルドグリーンでとてもきれいです」

「ツグミは胸から腹にハートの模様があって可愛いです」

と、チャームポイントを挙げていました。また、羽の色の表現がとてもユニーク。婚姻色で目先がピンク色になったコサギを、

「サクラの花びらを付けたみたいですよ」

と表現し、参加者の中に一目見てみたいという気持ちが高まりました。さらに、

「ユリカモメはこの時期、夏羽に移行中。だんだん『顔黒メイク』をしたようになり、北へ渡り、この辺りで見られなくなります」

という時間軸をずらした解説もあり、同じ場所で観察をしても季節が変われば見られる羽の色や鳥の種類が変わり、その都度楽しめるのだということがすんなり伝わってきました。

観察した鳥は、カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、トビ、バン、オオバン、コチドリ、ムナグロ、イソシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤブサメ（未確定）の 40（+未確定 1）種と外来種のドバトでした。鳥合わせでは種類の確認以外に個体数の確認もしており、観察した鳥の定量的な情報を記録として残していくことが強く意識されていると感じました。

＜参加者の声＞

以下は探鳥会に参加しながら雑談の中でお聞きした参加者の感想です。

30 代くらいのご夫婦：「近所に住んでおり、新聞を見て探鳥会を知りました。保護区の中にも入れるので参加しました。詳しい人に教えてもらえておもしろいです。」

60 代くらいの女性：「探鳥会に来ると自然に詳しい人に昆虫などについても教えてもらえて世界が広がります。河原でご飯を食べるのもなかなかない機会なので気持ちがいいです。予約制でないところもその日の天候や気分で参加を決められてよいですね。」

小学生の男の子を連れたお母さん：「最近引っ越してきて、自然好きの息子に機会を持たせてあげるために野鳥の会に入りました。息子は詳しい人の隣をしっかりキープしています。」

＜まとめ＞

経験者と初心者を分けての解説は、経験者は繰り返しの説明を受けなくて済み、初心者は丁寧な説明を受けられ、両者にとってよかったのではないかと思います。ただ、グループ分けをするためには、リーダーの人数も必要になってきます。もしかしたら、3 団体の共催で実施されていることで人材が豊富になり、実現可能となっているのかもしれないと

思いました。

ロングコースでは淡水や干潟など自然条件の異なる土地を周ることで多くの種類の鳥を見ることができ、身の周りにこれほど多くの鳥がいるのだと実感できる探鳥会でした。

清澄庭園探鳥会

参加日時：2013 年 4 月 20 日 14 時 20 分～16 時 30 分

天候：曇りのち雨

＜探鳥会の概要＞

清澄庭園は東京の下町、江東区の町の中にあります。面積は 81,091 ㎡、池と庭石に特徴をもつ都立庭園です。江戸時代に作られ、明治年間に岩崎弘太郎によって整備され、その後東京都に寄付されました。

探鳥会は庭園の池の周りを一周するコースでした。気温約 10 度と寒い日でしたが、初参加者 4 名を含む 9 名の参加がありました。観察はリーダー１人当たり 2～3 人を対応する形で進められました。

＜解説の様子と観察した鳥＞

この日は途中雨も降り出し、鳥がほとんど見られませんでしたが、リーダーはそんな時にも慣れている様子。

「清澄庭園には全国から集められた名石があります。雨の方が濡れてきれいに見えますよ」

「ハゼノキの実は鳥類が好んで食べます。和蝋燭の原料にもなります」

「ミツマタは枝が必ず 3 つに分岐するのでこの名前です」

と、庭園の名石や植物の話を交えた解説をされていました。この日は昆虫に詳しい常連参加者もいらして、

「この葉の食べ跡はサンゴジュハムシの幼虫です。鳥は穴が開いた葉を狙って幼虫を探しに来ますよ」

と、解説に加わっていました。またこの方は昆虫採集用として折りたたみ傘を持参。木の下に傘を逆さに置き、木を揺らして落ちてきたクモを傘で受け止め、参加者に披露してくれました。もちろん観察後は、クモをもとい

▲傘を使って捕まえたクモを披露

た場所に帰したのは言うまでもありません。

観察した鳥は、カワウ、カルガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、シジュウカラ、カワラヒワ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの 12 種と外来種のドバトでした。こちらの探鳥会でも鳥合わせでは種類の確認以外に個体数の確認が行われていました。

＜参加者の声＞

以下は探鳥会に参加しながら雑談の中でお聞きした参加者の感想です。

40 代くらいの男性：「休みの日は出来るだけ探鳥会に参加しています。今日は午前中に別の探鳥会に行ってきました。」

50 代くらいの女性：「野鳥の会の探鳥会に来ると皆さん詳しいのでいろんなことが分かるようになります。最近ブログを始めたので今日のことも記事にする予定です。」

＜まとめ＞

お話を伺った参加者の方は、探鳥会では鳥以外にも、自然に関わるいろんなことを知ることができてうれしいとおっしゃっていました。今回のように鳥がほとんど見られない時でも、植物や昆虫の話が聞けたことで十分満足されていたようです。とは言っても、そのためにはたくさんの知識が必要です。それが出来るリーダーの皆さまは本当にすごいなあと感心するばかりです。清澄庭園での探鳥会は 30 年以上の歴史があるそうです。都心の小さな庭園で長年続けて来られたことで、常連参加者も現われ、その方たちも含めた独特のより深い探鳥会になっているのだろうと感じました。

（普及室/堀本理華）

◆探鳥会保険集計結果（2013 年 3 月分）

3 月は 65 支部からご報告をいただき、計 254 回の探鳥会が開催され、のべ 6,263 人が参加されました。

表１．3 月の探鳥会保険集計結果（2013 年 5 月 7 日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員（人）	非会員（人）		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	1	21	8	1	30

根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	0	0	0	0	0
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	1	7	0	2	9
道北支部	0	0	0	0	0
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	2	25	10	3	38
小樽支部	2	6	2	2	10
苫小牧支部		0	0	0	0
室蘭支部	1	23	4	3	30
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	7	1	3	11
あおもり	−	−	−	−	−
弘前支部	3	33	2	3	38
秋田県支部	3	20	3	3	26
やまがた	1	7	0	1	8
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	1	5	3	2	10
北上支部	0	0	0	0	0
宮城県支部	4	73	12	7	92
ふくしま	2	40	4	5	49
郡山支部	2	22	0	6	28
二本松	1	9	0	2	11
白河	0	0	0	0	0
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	17	0	1	18
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	−	−	−	−	−
茨城県	13	123	82	20	225
栃木	−	−	−	−	−
群馬	1	142	93	24	259
吾妻	−	−	−	−	−
埼玉	13	338	60	92	490
千葉県	9	146	64	39	249
東京	15	562	23	72	657
奥多摩支部	12	154	27	42	223
神奈川支部	14	246	91	42	379
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−
富山	2	33	5	2	40
石川	2	40	0	5	45
福井県	1	10	0	1	11
長野支部	1	13	7	2	22
軽井沢支部	1	14	14	1	29
諏訪	1	15	31	2	48
木曽支部	−	−	−	−	−
伊那谷支部	−	−	−	−	−
甲府支部	2	37	1	4	42
富士山麓支部	1	11	28	6	45
東富士	−	−	−	−	−
沼津支部	1	6	2	2	10
南富士支部	2	57	15	3	75
南伊豆	1	8	1	2	11

静岡支部	−	−	−	−	−
遠江	3	52	5	9	66
愛知県支部	15	139	194	39	372
岐阜	−	−	−	−	−
三重	5	46	21	10	77
奈良支部	4	97	0	8	105
和歌山県支部	1	4	5	3	12
滋賀	4	36	31	8	75
京都支部	6	70	34	11	115
大阪支部	25	473	130	120	723
ひょうご	−	−	−	−	−
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	2	24	15	2	41
島根県支部	2	15	8	2	25
岡山県支部	6	147	69	18	234
広島県支部	5	53	30	5	88
山口県支部	5	32	36	5	73
香川県支部	2	64	16	3	83
徳島県支部	5	62	17	5	84
高知支部	−	−	−	−	−
愛媛	7	54	33	13	100
北九州	4	56	5	4	65
福岡支部	9	192	24	18	234
筑豊	3	27	5	2	34
筑後支部	4	24	11	7	42
佐賀県支部	4	73	17	4	94
長崎県支部	−	−	−	−	−
熊本県支部	6	94	17	7	118
大分県支部	2	16	3	2	21
宮崎県支部	2	15	4	2	21
鹿児島	4	61	19	11	91
やんばる支部	−	−	−	−	−
石垣島支部	0	0	0	0	0
西表支部	1	2	0	0	2
全国	254	4,198	1,342	723	6,263

備考：−は報告がなかったことを示しています。

（普及室）

◆普及室からのお知らせ

■2012 年度野鳥撮影マナーアンケート集計結果速報■

昨年 12 月末に依頼しました「野鳥撮影マナーアンケート」の集計結果をダイジェストでお送りいたします。

アンケートは 12 月末に、全国 90 の支部等連携団体（以下　支部）にメールまたは郵便にて調査用紙をお送りし、1 月末日の締め切り後の 2013 年 2 月 12 日に、再度回答のお願いをお送りしました。

アンケートにご回答いただきましたご担当者様に厚く御礼申し上げます。

1. 『回答数は 50 支部』

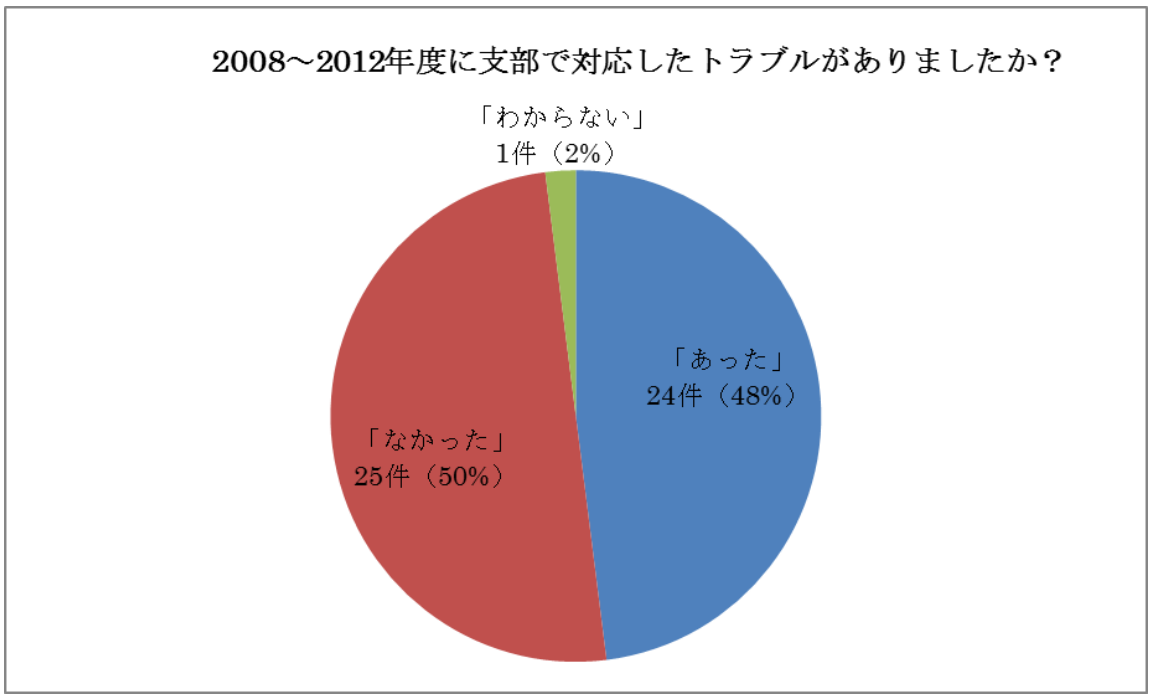
90 支部中ご回答いただいたのは、50 支部でした。（回答率 56%）

2. 『過去 5 年間で「何らかの対応をした支部」と「しなかった支部」は拮抗している！』

過去 5 年間（2008～2012 年度）で、支部として何らかの対応をおこなったと回答した支部は、24 支部（48%）でした。

反対に「対応したケースはなかった」と回答された支部は 25 件（50%）となり、「対応した支部」と「しなかった支部」の数は拮抗していることがわかりました。写真撮影のマナーに関する問題は、対応に苦慮している支部がいる一方で、現時点で大きな問題とはなっていない支部もあり、温度差の大きい問題であることがうかがえました。

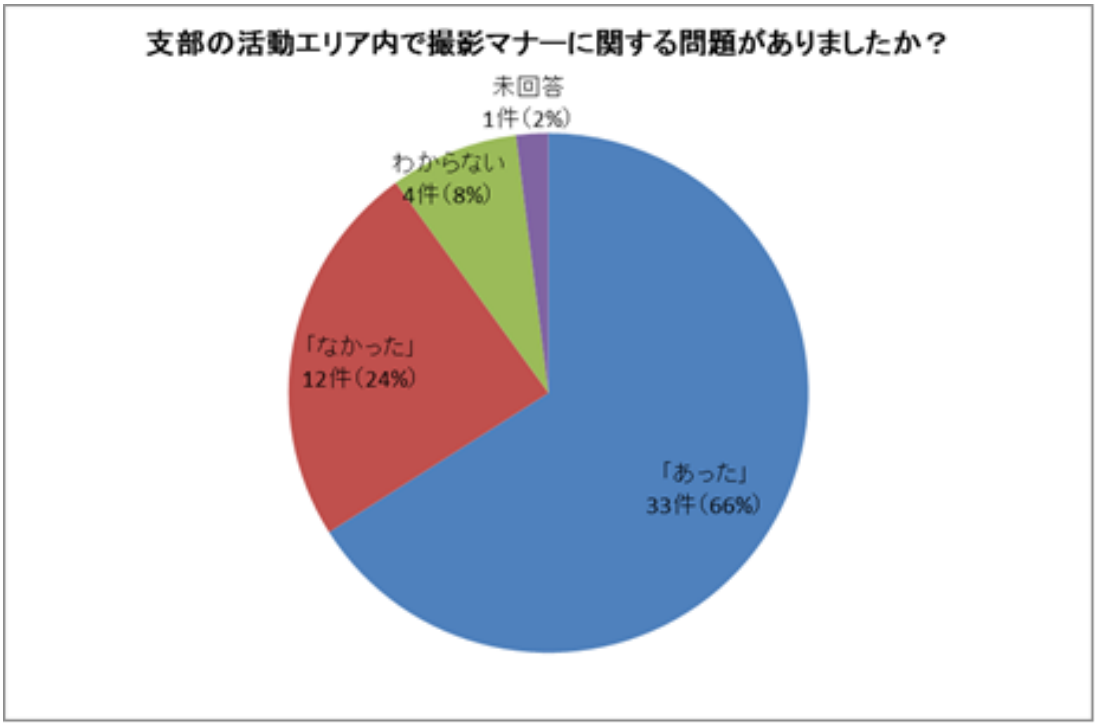
なお、2007 年度に実施したフィールドマナーに関するアンケート調査との比較により、この 5 年間での変化を読みとろうと試みましたが、2007 年度と 2012 年度の両方に回答していただいた支部が 20 件と少なかったため断念しました。



3. 『支部の活動エリア内で撮影トラブルが発生していたのは、回答者中

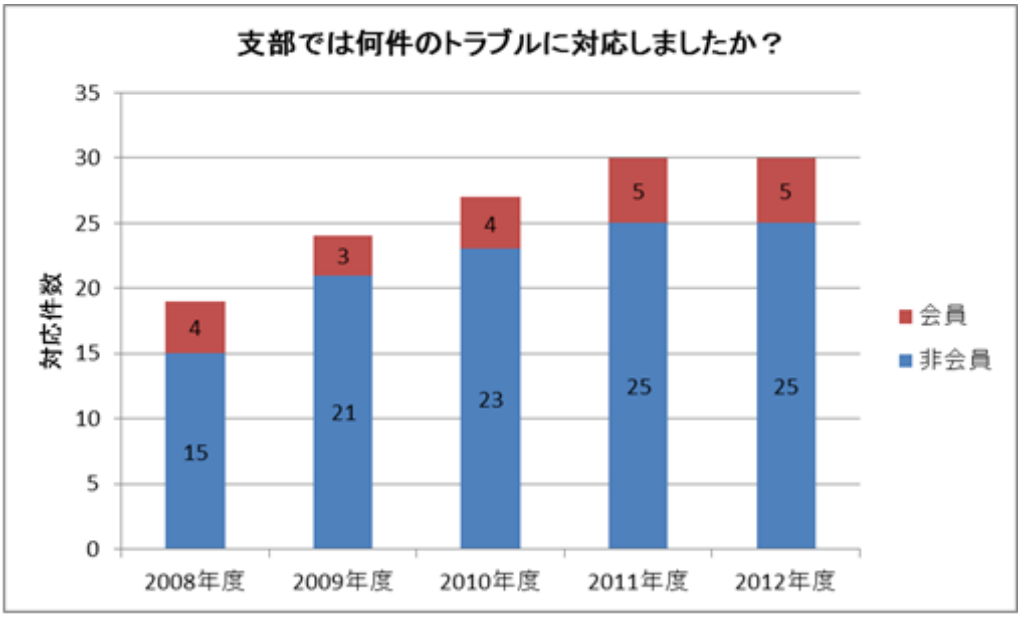
66%』

「支部での対応はなかった」とする 25 支部のうち、9 支部が実際には地域で撮影マナーに関する問題が起こっていたと回答されていました。したがって、支部のエリア内で撮影マナーに関するトラブルが発生していた支部は、2. のグラフの「トラブルがあった」とする 24 件に、実際には地域で問題が起こっていたと回答された 9 件を加えて合計で 33 件となり、回答者の 66%であったことがわかりました。



4. 『支部の対応件数は増加傾向にある？』

過去 5 年間の支部の対応件数については、2011 年度までは明らかな増加傾向が見られ、2012 年度は前年度並みとなりました。(そのうち会員が関わったのは、13～21%)
2012 年度が前年度並みとなっている理由は、アンケートを送付したのが 12 月末であり、回答してくださった支部の方でまだ 2012 年度の件数が集計できていなかったためではないかと思われます。



5. 『もっともトラブルの対応に追われていたのは、神奈川、千葉、宮崎？』

2008～2012 年度までの各支部の対応件数を合計し、一覧表にしてみました。これを見ると、神奈川、千葉がダントツに対応件数が多く、日々対応に追われていることがうかがえます。次に宮崎が 14 件と続き、群馬 9 件、遠江、京都 7 件、愛媛、北九州 5 件と続きます。宮崎は、ヤイロチョウという希少種に関わるトラブルが大きな問題となっていたことが影響しているようです。

それ以降は、江別、茨城県、埼玉、岐阜、滋賀、徳島県、熊本県、鹿児島は 2 件、根室、東京、長野、富士山麓、静岡、広島県、香川県、佐賀県の 1 件と続きます。

事前の予想では大都市圏ほど、こうした問題が頻発しているのだろうと予想していたのですが、もっとも会員の多い東京が 1 件と少なく、意外な結果となりました。

なお寄せられた事例集からは、件数は少なくとも希少種保護の観点や農家への迷惑防止など、無視できない問題に対して対応に苦慮している各支部の担当者の様子をうかがい知ることができました。

支　　部	対応件数(2008-2012年の合計件数)
神奈川支部	30
千葉県	29
宮崎県支部	14
群馬	9
遠江	7
京都支部	7
愛媛	5
北九州	5

江別支部	2
茨城県	2
埼玉	2
岐阜	2
滋賀	2
徳島県支部	2
熊本県支部	2
鹿児島	2
根室支部	1
東京	1
長野支部	1
富士山麓支部	1
静岡支部	1
広島県支部	1
香川県支部	1
佐賀県支部	1
オホーツク支部	0
釧路支部	0
宮古支部	0
白河	0
奥会津連合	0
いわき支部	0
福島県相双支部	0
南相馬	0
栃木	0
吾妻	0
佐渡支部	0
富山	0
軽井沢支部	0
諏訪	0
木曽支部	0
沼津支部	0
南富士支部	0
南伊豆	0
奈良支部	0
和歌山県支部	0
ひょうご	0
岡山県支部	0
高知支部	0
筑後支部	0
石垣島支部	0
西表	0
	130

6. まとめ

○撮影マナーの問題は、一部都市圏で大きな問題となってきていますが、全国的にみると問題意識に開きがあります。

○とはいえ、ここ５年間で急速に支部での対応が迫られるようになってきており、今は

問題とは認識していない支部にとっても、今後問題となってくる可能性を秘めています。

○今回いただいた事例集を整理する中で、どのような問題が発生しているのかについても引き続き分析を進めることとします。

○事例集は、各支部宛に郵送と電子メールにて個別にお送りします。

（普及室/箱田敦只、堀本理華）

■2013 年度「ヒナを拾わないで！！キャンペーン」がスタート！■

野鳥の子育ての季節、人によるヒナの誤った保護を防ぐため続けてきた当キャンペーン。今年で 19 回目を迎えますが、毎年問い合わせが途絶えることはありません。ヒナを保護することは、じつは良くないということを普及するために、またこのキャンペーンが人と野生生物との関わりを考える機会になるよう、皆様のご協力をお願いいたします。

＜紙芝居「わたしのことり」を上演してください＞

ヒナを拾わないことの意義を子どもたちに伝えたい。昨年度、この思いを形に紙芝居を発行しました。今年も読み聞かせをしていただく方を募集中です。多くの場でお読みいただくことが、野鳥の子育ての応援に繋がります。ぜひとも読み聞かせ隊のお一人として活動してください。

▲紙芝居表紙

読み聞かせの活動をしていただける方には、紙芝居 1 冊をご寄贈させていただきます。当会ホームページから紙芝居の申込書をダウンロードしていただき、郵送または FAX、メール添付でお申込みください。

お申込みにあたって

●年間最低 1 回は上演していただけますようお願いいたします。

●読み聞かせ参加者に当会制作の冊子「ヒナとの関わり方がわかるハンドブック」をお配りください。なぜヒナを拾ってはいけないかというメッセージをより深く伝えることができます。

▲紙芝居を活用している様子

●実施のご報告をお願いすることがございます。またご報告いただいた内容はブログ等でご紹介させてください。読み聞かせをしている方々同士の情報交換の場にもしたいと思います。

●送料をご負担ください。着払いで送らせていただきます。

▲会長の読み聞かせの様子

柳生会長による、紙芝居「わたしのことり」読み聞かせ映像を配信しております。

ぜひご覧いただきご自身が読み聞かせをされる際、ご参考になさってください。

日本野鳥の会　ヒナを拾わないで　で　検索　をしてください。

＜『ヒナとの関わり方がわかるハンドブック』をご活用ください＞

落ちているヒナに遭遇した時の対応の仕方がわかる冊子を作りました。子どもでも楽しんで理解できるよう、野鳥の子育ての話やクイズも掲載しています。お子様にも楽しんでいただけるように、ヒナと出会う場面ごとの対処方法とともに、野鳥の子育ての話やクイズも掲載しました。ご希望の方には無料でプレゼントいたします。

▲冊子表紙

1. 氏名（フリガナ）
2. 生年月日（西暦）
3. 性別
4. ご住所（郵便番号必須）
5. 電話番号

をご記入のうえ、以下の方法でお申込みください。メール、ＦＡＸ、郵便で日本野鳥の会「ヒナハンドブック」係あてお申込みください。

＜お申込み・問い合わせ先＞

日本野鳥の会　普及室　　普及教育グループ

〒141－0031 東京都品川区西五反田 3－9－23　丸和ビル

TEL：03－5436－2622　FAX：03－5436－2635　　E-mail：nature@wbsj.org

■探鳥会スタッフ通信の購読について■

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記の上、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレスを記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。

紙での発行につきましては、各支部 2 部ずつ郵送させていただきますのでそちらをご覧いただきますようお願い申し上げます。

★編集後記

こちらは初夏を思わせるような日も増えてまいりました。探鳥会スタッフ通信、第 2 号目となり、ようやく記事も充実させることができました。探鳥会でお会いした皆さまありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

（普及室/堀本理華）

探鳥会スタッフ通信　第 2 号

◆発行

（公財）日本野鳥の会　2013 年 5 月 21 日

◆担当

普及室　普及教育グループ

〒141-0031　東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

TEL：03-5436-2622

FAX：03-5436-2635

E-mail:tancho-staff@wbsj.org